

# 虚子記念文学館投句特選句・令和二年十月

稲畑汀子 選

ついて来し風も行き過ぎ秋の暮

大阪 大川隆夫

虚子館や金木犀が我を待つ

新潟 安原 葉

しんみりと飲むも新酒でありにけり

奈良 好川忠延

民宿の朝を早めて鳥威

兵庫 小杉伸一路

褒められて萩恥らひて零れけり

兵庫 高野さち

金木犀雨の重さの匂ひくる

兵庫 清瀬 環

秋の灯や砂場に残る小さき山

東京 宮村土々

奥能登の黄金千枚豊の秋

大阪 山下幸典

酒好きの父祖のことふと新酒酌む

京都 山崎貴子

退院の友来る朝よ秋の空

兵庫 武田奈々

(青少年)

# 入選句・令和二年十月

雲を脱ぐ月は硝子のやうな綺羅	兵庫	川村ひろみ	虚子館の静かに混みし秋日和	兵庫	玉手のり子
倒伏の稲をむち打つ雨哀し	三重	松村咲子	榎檀の実お持ちください書かれあり	兵庫	高橋純子
虚子館を訪うて豊かな秋を知る	兵庫	山之口倫子	内定のスーツ胸はる赤い羽根	兵庫	永沢達明
マロニエの実やご快癒の笑みならん	兵庫	西村正子	旅荷には重き榎檀の土産かな	兵庫	高杉靖子
医者要らずと柿剥く母の太き指	兵庫	槌橋眞美	榎檀の実落ちて青空残りけり	兵庫	池田雅かず
すれ違ふ順路に零す白き萩	兵庫	太田路子	水音にさへも零るる萩の庭	石川	辰巳葉流
白萩の楚楚とこぼるる邸の庭	兵庫	内田泰代	臈捌きに身を委ねたる水の秋	兵庫	吉村玲子
白萩の白を奏でる水の音	大阪	石橋玲子	庭であれば木の実の一つ転がり来	大阪	辻田あづき
秋晴や手術必らず成功す	兵庫	森岡喜恵子	秋気澄む湯船の先の瀬戸の海	兵庫	山田佳乃
振袖の乙女にも似て萩揺るる	兵庫	小柴智子	秋天へタワーの赤映ゆ港町	兵庫	深尾真理子
蹲の水面に潜む秋の声	鳥取	前田 千	不揃ひのてるてる坊主運動会	兵庫	辻 桂湖
水音や榎檀六個の淋しさに	大阪	岡西恵美子	ときめきは塞ぎし日々には照紅葉	兵庫	河野ひろみ
コロナ禍の敵はぬ帰郷鳥渡る	京都	算 双子	咲くも又散るも風情や萩白し	兵庫	岩水ひとみ
無礼講にて虚子館へ小鳥来る	石川	村上秀吾	運動会はやる心を深呼吸	兵庫	入谷千恵子
咲き乱るとも白萩のなほ清ら	兵庫	齊木富子	峡深く照葉波打つ風となる	兵庫	中村恵美
人声に触れて零れて萩の花	兵庫	宮本露子	露の世を道に添ひゆくありのまま	兵庫	山口弘子
裳裾曳く白萩の揺れ零るまま	大阪	杉山千恵子	栗好きや縄文人の血を引きぬ	兵庫	伊藤秀子
水音を鎮める邸の萩に触れ	兵庫	黒田千賀子	つかの間の露のこぼるる大野原	兵庫	山岸正子
白萩の揺れてこぼれて迎へくれ	京都	宮本幸子	冷凍す剥きたる栗の一年分	兵庫	三木雅子
秋雨のみかへり阿弥陀微笑みし	兵庫	千家恵子	秋声や李朝青磁の歪みをり	東京	南方日午
虚子館へ歩いて行かう新松子	兵庫	藤井啓子	てぬぐひと月吾れと在り野天風呂	神奈川	平野孤舟
照葉なか嵯峨野トロッコ軋みつつ	大阪	西尾浩子	古きより添水に守られたる美田	兵庫	柄川武子
窓開けし秋気満ちたる試験場	兵庫	鈴木ひとみ	乱切りの薪に一陣萩の風	兵庫	西村みどり
どこへ行くにも秋晴の影を曳き	鳥取	棕 誠一朗	しばらくは団栗拾い園の庭	兵庫	小川孝子
虚子館に清しく聞きぬ秋の声	鳥取	棕 則子	密度濃き木犀の香に気圧さるる	兵庫	山本康子
俳磚の余白にそつと小鳥来る	兵庫	奥田好子	萩こぼれこぼれて庭を寂しめり	兵庫	山西商平
幾年を過ごせし窓辺月を待つ	兵庫	岸川佐江	濡れるほど紅の際立つ藤袴	兵庫	英賀美千代
秋高し神戸は海山近き街	兵庫	涌羅由美	研して山車どの辺り秋祭	兵庫	二瓶美奈子
			主去りし柵田を守る曼珠沙華	兵庫	福間笙子

虚しきは白萩散つてをりしこと	兵庫	田中節夫
白壁の戸毎柿熟れ宿場町	兵庫	渡辺しま子
予定表空白のまま秋深む	兵庫	高市敦之
横川の忌修し終へたり冬近し	大阪	河辺さち子
秋晴を誇りて芦屋川の松	兵庫	池田文子
心まで秋晴になる一会かな	大阪	須知香代子
底抜けの大秋晴を讃へけり	兵庫	松田恭子
秋の日に羽干す鳥や芦屋川	大阪	鶴岡言成
廻遊の庭に一景植紅葉	兵庫	岸田 健
横川路の木の実時雨や忌に侍る	滋賀	石川多歌司
神木の木犀愛づるゆふべかな	千葉	玉井令子
秋耕の重さを抜けて鳶の影	京都	杉森大介
昨日より今日の十六夜窓あかり	石川	辰巳昌彦
蟪蛄と渾名されし子やさしかり	兵庫	キートスばんじょうし
鬼灯の茶枯れし残る日だまりに	神奈川	金子三奈乃
青空を切り抜いて秋の八ヶ岳	埼玉	土井洋子
秋の灯の揺れゐて妣が来たるかと	東京	三球
鬼灯を紙風船のやうに手に	神奈川	進藤剛至